



朝日新聞社

坂洋次郎

いらくの記



老いらくの記

定価 一〇〇〇円

昭和五十二年四月三十日第一刷発行
昭和五十二年七月二十日第六刷発行

著者 石坂洋次郎

発行者 角田秀雄

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社
東京・大阪
名古屋・北九州

目次

I 老いらくの記

七十六歳の実感

11

安楽死など

15

チャック忘れて

19

冬の夜の思い出

24

今日も過ぎゆく

28

レオの話

32

女学生と同級会

36

弘前にいたころ

41

妻の名は「……」

45

私の文学碑

49

酒と俳句と

“出ると負け”の思い出

人間とは――

娘の幸せと母親

*

禿げ頭

父と母

水洗便所

オカマ

めぐり会い

男女の服装

97

92

87

82

76

71

66

62

58

53

屋根の上のヴァイオリン弾き

100

*

仲間よ、元気で

105

Ⅱ 老年もまた楽し

ふるさとは遠きにおいて

111

職業としての文学

152

私はこう思う

156

今日も私はぐちる

161

ぼっくり死にたい

169

私と家族について

173

文学碑と女学生

ある日

わが旅は終る

老年万歳

*

あとがき

251

232

212

207

184

裴
楨
生
沢
朗

老いらくの記

I

老 い ら く の 記

七十六歳の実感

私の住んでいる家は、地下も数えると三階建てだが、私の部屋はその二階の右端にある。庭の眺めもあり、日当りもよく、テーブル、洋服入れ、テレビ、ベッドといった家具がそろえてある。内側のドアをあけると、便所、浴室が小さいくして整えられている。

老人になった私は、こらえ性がなくなり、便所はよく使うが、風呂にはめったに入らない。いや、風呂どころか、三日に一ぺんぐらいシャワーを浴びるだけである。老いては子に返るとかいうが、本州の最北端の津軽の城下町、弘前に生れた私は、うちの井戸の水はおいしいけど、わくが十本もはまっていて、汲み上げて、住宅の端れにある風呂おけに、トタンの細長い管で流しこむには、労力がたいへんなので、月に一ぺんぐらいしか風呂はわかさなかつた。ほかに、やはり月に一ぺんぐらい町の銭湯に出かけたものだ。これも清潔なものではなかつた。しかし、町の人達は、その湯に首までひたりながら、時々その赤ぐろい湯を両手でしゃくって喉に流しこみ、ガラガラとうがいをして流し場にベツと吐き出したりして、入浴の気分を楽しん

だりしていたものだ。

今日の私が、入浴をあまり好きでないのは、子供時代のそういう体験によるものであろう。夜、十時すぎ、ぬるい湯でゆっくりシャワーを浴びる。この時はもちろん髪も洗う。それからタオルで身体をふきとると、寝巻きを着てすぐベッドに入る。三十分か一時間ぐらいぐずぐずしてやっと眠る。が、朝七時半の起床までには、三回ぐらい小用に起きる。この時はしびんは用いず便所に入る。

老化現象というのは、身体ぜんたいに起こるものだが、原稿が書けない、ゴルフは下手になる一方、排便、排尿の回数が多くなる、女性に肉体的魅力を感じない、などといった形で、私自身には意識されている。このうち、原稿、ゴルフ、女性などは、直接の肉体的な被害はないが、排便、排尿はうっかりしていると下着が汚れるので、よほど慎重にしなければならないのだ。正直に言って、一年に二回ぐらいは、下着を黄色く汚しているようだ。便所の前で、あるいは便所の中で、ズボンを脱ぐ間がなくてしくじってしまうのだ。口やかましい家内が生きていたら、どんなに叱られたことであらう。

わが家には、地方から来た二十歳ほどの若い女中が働いている。ある朝、私が階下の食堂で、洗たく用の下着類をわたすと、受けとって階下の洗たく室に運んでいき、そのあとで、

「旦那さん、下着の洗たくは二度でも三度でも私に出して下さい。私の母は、六十七歳かで亡くなりしましたが、それまではとても元気に暮しておりました。ところが、病気になって一と月

ばかり寝こむと、おしめなしでは過ごされないほど身体が弱ってしまいました。私も母の世話をしておりましたし、おしめの洗たくには慣れておりますから、旦那さまも遠慮せずに洗たく物を出して下さいよ」

「お前、年よりをいたわってくれるな。その通りにするからな。……お母さんは六十七歳か。お父さんはいま幾つだね？」

「母よりも十年も前に亡くなりました。……私も田舎に帰って結婚するつもりですが、私も母みたいに、夫よりもずっと長生きするだろうと思いますの」

「いい根性だ。がんばれよ。……わが家は、お前もみてる通り、奥さんよりも旦那の方が長生きしてしまっただな」

「旦那さんは……欲がないから長生きするんじゃないでしょうか」

「まあ、そういうことも知れないな」

私の家には、主婦がいないので、若い女中もしぜんおしゃべりになっているようだが、ほかに五十年配の家政婦も勤めており、この人は月に四、五日は実家に帰ってしまうし、また運転手君も、日曜、祭日以外には通勤してくる。彼は十七、八年ほど勤続しているし、わが家のことは何から何まで心得ており、安心して万事まかせておける。このほか都内に嫁びいている長女（五十ぐらいか）が一週間に二度ぐらい訪ねて来て、会計、交際などの仕事一切を処理していつてくれているが、

「おとうさん、もうお小遣がなくなつたでしょう。はい、これだけ……」と、一回に三万円ずつ、月に三べんほど私にお金を置いていってくれる。

これらの金銭は、私の旧著の印税でまかなわれているのだが、勤人の恩給のようなものなのだろう。私はそのお小遣を、毎日散歩に出て、途中でコーヒーを飲んだり、歩き疲れると帰りはタクシーに乗ったり、十日に一べんぐらい日比谷に映画を観に行ったり、ついでにあの付近で食事したりなど、そう追いたてられる気もせずによく使っている。こういう状態がいままで可能なのか分らないが……。

その私は今年、七十六歳。あと一、二年でボツクリというところだろう、とそう感傷性もなく考えている。女が抱ける肉体も、小説が書ける頭脳も、改まって欲しいなどと思わないのが、私の昨今の実感である。